

2005年6月5日 聖霊降臨節第4主日礼拝

『律法か福音か』

(エゼキエル 44 章 4～9、使徒言行録 15 章 1～5)

パウロとバルナバが、アンティオキアの教会から派遣されて、第一回の伝道旅行に出て行きました。どこの町に行ってもいつもこういうことが起こりました。ある人々は、パウロたちが語る御言葉を信じて、クリスチャンになります。しかし、同じ御言葉を聞いても信じない人たちも少なくありません。その人たちは、パウロたちに激しく反対しました。時には命の危険にもさらされました。しかし、多くの反対にあいながらも、神の業によって各地に教会が建てられて行ったのです。二人は、御言葉を語った町に行き、各地の教会に長老たちと任命し、信仰に踏みとどまるようにと励ましてアンティオキアに戻って来ました。

アンティオキアの教会に着くとすぐに、教会の人たちを集めて報告しました。「神が自分たちと共にいて行なわれたすべてのことと、異邦人に信仰の門を開いてくださった事を報告した」(14 章 27 節)のです。アンティオキアの教会も、ユダヤ人と異邦人が共に礼拝する教会です。異邦人の救いを知らせるこの報告は、教会で何の疑問もなく受け入れられたのです。

そうして、パウロたちはしばらくの間、アンティオキアの教会で兄弟たちと共に過ごしていました。そんな時です。ある人々が、ユダヤから下って来ました。その人たちは、ファリサイ派から信者になった人たちでした。この人たちが、異邦人の兄弟たちにこう教えたのです。「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない」と。ユダヤ人であるこの人たちにとって、割礼は当たり前でした。神の民が割礼を受けるのは当然である。アブラハムの時代から、ユダヤ人は言うに及ばず、イスラエルに寄留して神を信じるようになった異邦人たちや、ユダヤ教に改宗した異邦人たちも、かつて割礼を受けてきました。異邦人のクリスチャンも、当然自分たちと同じように割礼を受けるべきだと考えていたのです。この人たち、つまり異邦人に割礼を受けるように促した兄弟たちとパウロやバルナバとの間に、激しい対立が起こりました。今度は、教会の中から危機が起こったのです。その対立の危機は、次第に無視の出来ないものとなりました。そこで、パウロやバルナバと他に何人かの人たちが、エルサレムに行くことになりました。ここには、パウロたちに反対の人たちも含まれていました。この件について、使徒たちや長老たちと話し合うためです。はたして、異邦人のクリスチャンが割礼を受ける必要があるのか。それを、エルサレム教会で協議するためでした。

一行は、アンティオキア教会の人々から送り出され、フェニキアやサマリヤ地方を通ってエルサレムに向かいました。サマリヤ地方は、かつてステファノの殉教をきっかけに、散らされていった人々フィリポたちによって御言葉が語られ、教会が建てられた地域です。パウロたちは、この人々に、異邦人がイエス・キリストを信じてクリスチャンになった次

第を詳しく伝えました。この報告は、皆を大いに喜ばせたのです。異邦人のクリスチャンに割礼を、と訴える人たちにとっては、面白くなかったに違いありません。

さて、パウロとバルナバを含むアンティオキア教会の一行は、エルサレムに着きました。一行は、教会の人々や使徒たち、長老たちから歓迎を受けました。それでパウロやバルナバたちも、神が自分たちと共にいて行なわれたことを、ことごとく報告しました。この報告は、エルサレムの教会にとっても喜ばしい報告でした。かつてペトロを通して、百人隊長コルネリウスとその家族に福音が語られたことがあります。御言葉を聞いていたコルネリウスとその家族、友人たち一同は、イエス・キリストを信じて洗礼を受けました。その人たちの上に聖霊が下るのを、ペトロや他の割礼を受けた信者たちも見ていました。この出来事がエルサレムの教会に報告された時、教会の人々は最初の内こそ戸惑いました。しかし、ペトロが順序正しくことの次第を話すと、人々は、「神は、異邦人をも悔い改めさせ、命を与えてくださった」(11章18節)といって神を賛美したのです。

ペトロの報告を喜んで聞くことが出来たのですから、当然パウロたちの報告も歓迎されるはずでした。異邦人に神が救いの門を開いてくださったというのですから。

ところが、この報告を喜んで聞けない人たちが、教会の中にいたのです。ファリサイ派から信者になった人びとが数名立ち上がって、こう言ったのです。「異邦人にも割礼を受けさせて、モーセの律法を守るように命じるべきだ」(15章5節)というのです。この人たちは、アンティオキアの教会でパウロやバルナバに反対した人たちだったのでしょうか。それとも、エルサレムに在住する元ファリサイ派の信徒だったのでしょうか？ はっきりとはわかりません。とにかく、エルサレムにもアンティオキアにも、異邦人の救いを喜ばない人たちがいたのです。

異邦人にも、自分たちと同じようにモーセの慣習を守らせて、割礼を受けさせることが神の御心だと、この人々は信じていました。これは、単純にユダヤ人对異邦人という問題ではありません。わたしたちが、教会で新しく信者となった人たちをどう受け入れて来たのか。これからどう受け入れて行くのかということなのです。新しい信徒といっても、教会員にとって古くから馴染みの人で、その教会の様子をよく知っている人が洗礼を受けた場合は余り問題にはならないかもしれません。しかし、例えば教会に来るのが全く初めてで、教会の中に馴染みの人もない人。あるいは、遠くから引っ越してきたばかりで、この土地のこともよくわからないし、この教会の様子もよく知らない。でも、聖書のこと聞きたい、キリストってどんな方がよく知りたい。そんな新来会者が来た時に、わたしたちはどうしているのでしょうか。そういう方たちも、キリストのゆえに、古い馴染みの人と変わらない様に受け入れているのか。それとも、馴染みの薄い人たちは遠巻きにしてきたのか。キリストを知ってもらいよりも、自分たちの教会の習慣を教え込むことばかり熱心になり、自分たちと同じやり方をしないひとたちには冷たくあしらって来たのか。ここで問題になっているのは、こういうことです。自分たちとは生まれも育ちも違う。ライフスタイルも違う。けれど、同じようにキリストを信じている兄弟姉妹が、お互いを受け

入れられるのか。キリストゆえに兄弟姉妹と認めて行けるのか。それが問題だったのです。エルサレムに世界で最初の教会が誕生したばかりの時は、こんな問題が起こるとは誰も考えていませんでした。何故なら、教会には初めは、ユダヤ人たちしかいなかったからです。

使徒たちや長老たちは、この問題について話し合うために集まりました。これが、最初の教会会議となったのです。パウロやバルナバに反対した人たちは、単にこの二人に反対したわけではありません。パウロやバルナバの行く先々で、共に働かれた神御自身に反対したのです。わたしたちは、かつて神に反逆するものたちでした。全人類が神の御心に背き、神がつかわしたキリストを十字架につけたからです。けれども神は、この主イエス・キリストのゆえに、わたしたちの罪を赦す方です。主イエス・キリストを信じる者なら誰にでも、神は救いの門を開かれるのです。そこには何の差別もありません。神がなされた救いの業に反対することなど、わたしたちには出来ないのです。

この会議の結論は、聖書をよく読んでいる方は、ご存じかと思います。神は、ユダヤ人にも異邦人にも聖霊を与えられました。ペトロもこう言っています。「わたしたちは、主イエスの恵みによって救われると信じているのですが、これは、彼ら異邦人も同じことです」(15章11節)。これを聞いていた全会衆は静まりかえり、パウロやバルナバたちの報告にも耳を傾けました。そして、異邦人に割礼は必要ないとの判断を教会はとりました。わたしたちにとって、この結論は大切です。

教会が成長し、あらゆる人々が救いに招かれるようになると、教会は新しい事態を迎えました。教会が更に成長し前進していくためには、どうしても乗り越えていかなければならない問題にぶつかることがあるのです。これは神が教会に与えた試練あるいは訓練です。聖霊に導かれた教会は、この問題を、み言葉により信仰によって乗り越えていきました。聖書の御言葉は、わたしたちを悔い改めさせ、更に成長させてくださる神の言葉です。

パウロも、こう書いています。「キリストは、わたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律づくめの律法を廃棄されました。こうして、キリストは双方を御自分において一人の新しい人に造りあげて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意をほろばされました。」(エフェソ2章14~16節)。

どのような人であろうとも、クリスチャンは皆、神が招いた人たちです。今、教会に集まっている求道中の方たちも、神が招いた人たちです。神に招かれたものとして、わたしたちは兄弟姉妹として互いに受け入れあって行きたいと思います。それが神の御心を行なうことになるのです。

[説教者：堀地敦子牧師]